

# 徳大病院消化器・移植外科

## 20年間の歩み 記念誌に

徳島大学病院の消化器・移植外科を2004年から率いている島田光生教授(65)が、20年間の歩みをまとめた記念誌(A4判、592ページ)を刊行した。ロボット支援手術などの先端医療の導入やがん研究の状況、人材育成の取り組みなどを紹介している。

島田光生教授



徳島大学病院消化器・移植外科での20年間の歩みをまとめた記念誌を手にする島田教授  
徳島市の同大学病院

### 手術ロボ導入など成果紹介

島田教授は北九州市の出身で、1984年に九州大医学部を卒業。九州大学病院消化器・総合外科助教授などを経て、2004年に徳島大学病院に移り、消化器・移植外科の医師約20人のトップである教授に就任した。

また、徳島大学病院消化器・移植外科の医局全体を「大きな家族」と位置付け、医師たちと妻子を集めて、年2回開いてきた家族会の写真を掲載。中国やモンゴル、スウェーデンの大学などの交流事業についても紹介している。

記念誌の冒頭では「若く優秀で世界に通用する人材」を輩出することを肝に銘じ、留学を奨励するなどして、後進の育成に力を入れてきた点を強調。結果として、消化器外科医の多くが目標にしている日本消化器外科学会の評議員を9人、取得が難しい日本小児外科学会の指導医を3人輩出したことなどを記している。

治療面の成果では、胃がんと大腸がんに対するロボット支援手術を、18年の保険適用後に本格導入し、24年4月時点で胃がん200例、大腸がん230例で実施したことなどを挙げた。07年に「血液型の異なる提供者(ドナー)からの生体肝移植に四国で初めて成功した」といった新聞記事も収録している。

記念誌は1500部を発行し、大学関係者や開業医らに配布した。島田教授は本年度末に退官する予定で、「『出藍の誉』で、恩師を追い抜いてほしい」と、県内外で活躍する約50人の教え子たちにエールを送った。

(久保高茂)